

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：32803

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21500717

研究課題名（和文）中高年者の「お墓」観—成人期後期以降のライフ・イベント—

研究課題名（英文）A Study on the Middle-aged and Elderly People's Perception towards "Graves": Decision-making Process about Their Own Graves as Life Event

研究代表者

伊波 和恵 (INAMI KAZUE)

東京富士大学・経営学部・准教授

研究者番号：90296294

研究成果の概要（和文）：

(1)首都圏在住中高年者に、死生観、QOL とライフ・イベントとしてのお墓の意思決定との関連を調査し、(2)アメリカ都市在住者のお墓観と比較した。また、(3)お墓を通じて提起された家族関係性の再構築という観点から、おもに壮年者が抱える WFC の現状を検討した。その結果、(1)お墓の必要性は死生観・QOL と関連することが示唆された。(2)故人や祖先との絆に言及する日本人に対して、アメリカ人はお墓を無機的に捉える傾向が示された。(3)壮年者の WFC 事態は、向老期に先立ち、家族関係性再構築の契機となり得ることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

(1)We distributed questionnaires and conducted follow-up interviews among the middle-aged and elderly people in and around the Tokyo metropolitan area in order to find the correlation between "the decision-making process about their own graves as life event" and "the general view of life & death" or "the QOL". Then, (2) we made a comparative analysis with the data collected in San Francisco. Also, (3) we inspected the status-quo of the WFC among the people in their prime age in the light of restructuring of family relationship through discussing their own graves. As a result, we've discovered that (1) there is potential correlation between the needs of graves and the view of life & death or the QOL, and that (2) Americans tend to view graves as inorganic substances whereas Japanese are likely to refer to the graves as the bonding with their ancestors and deceased people, and that (3) the state of WFC among the people in their prime age can be an opportunity to reconstruct the family relationship.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：お墓・中高年・死生観・QOL・無形資産・WLB・家族・日米比較

1. 研究開始当初の背景

今日、多くの一般企業において団塊の世代が定年退職を経て、年金受給年齢を迎えている。いわゆるシルバーエイジと言われはじめる60歳代であるが、慢性的な健康不安を抱えている者はまださほど多くはないので自らの死に直面している状態ではないものの、親類縁者や年長の知人の老いや死を見聞する機会は格段に増すことになる。子育ての責任から解放されるかわら、高齢期にある親世代の介護や看取りを通じて、家族のかたちが変容し、世代交代の時期にさしかかる。現代日本においては、自らの老いや死へのイメージを漠然と形成しはじめる時期といえよう。

中高年者、とりわけ高齢者に対するQOL（生活の質、人生の質；Quality of Life）を考える際、彼らの“死”に対するイメージを把握することはとても重要である。なぜならば、“生きがい”を追求することはその逆ポジションである“死”を追求することと本質的に同等だからである。こうした高齢者のQOLやwell-being、あるいは生きがいと死生観とを結び付けて考える研究として、社会学者の金子[1990]や心理学者の杉山[1990]などがある。彼らは、“死生観”や“死に対する不安感”を調査することによって高齢者への情緒的サポートのあり方を検討している。

しかし、臨床の現場においては、高齢者に対して直接的に“死”（死生観）を問うことは現実的に難しい。“死”という概念が刺激的すぎ、また、“死”という概念をイメージすることが困難であるからである。

そのような中、伊波、下垣による福祉・介護の現場を通じて、死生観を直接的に問うことは難しくても、日本人である場合こうした時期に“お墓”について考えることは一般的であることを見いだした。自分の墓、親の墓、伴侶の墓などについては、どのような場所にどのような形で作ろうかといったことは、かなり具体的などころまで考えることができる。このお墓観を思い描く背後にはおそらく自らの死生観が存在しているはずであり、お墓のありようはその死生観の結果として現れてくるものと考えられる。

そこで、われわれは、直接的ではなく間接的に“死”への態度を把握できるような調査方法の開発を目標として、“お墓”に注目することにした。すなわち、死生観と“お墓”に対する考え方の関連を調査することによって、現状では把握しづらい死生観に対する測定アプローチを検討、構築し、高齢者の

QOL向上のインフラ提供を目的としている。その際、伊波・靱江・下垣[2005]の高齢者の“お墓”に対するイメージ調査などから、“お墓”自体も非常に抽象的な概念であり、そこには経済資産といった対象だけではなく、家族（イエ）の概念や宗教観も重要な要素であることがわかった。

これらのことから、本研究を進めていくにあたり、死生観と“お墓”に対する考え方をリンクさせるという心理学的なアプローチだけでなく、どのようなスペックでどれくらいの金額まで支払えるかと言った視点に基づく経済学的なアプローチや、すでにあるイエのお墓に入るか自分で建てるか、墓守はいるかといった視点に基づく、家族学、社会的なアプローチも重要であると考えている。さらには、お墓をめぐる現代日本の死生観、家族観の特質をよりの確に捕捉するためにも、比較文化論的なアプローチをも視野に入れ、次のように準備を進めた。

東京富士大学において、2006～2008(平成18～20)年度の3年にわたり学内共同研究費助成を得、次のように継続的に展開してきた。

- (1) 2006年度：中高年者に対するインタビュー調査（①お墓の選択・決定、②人間関係への配慮、③死生観、死に関する価値観）を実施（伊波・下垣・田畑・篠崎[2006]ほか）
- (2) 2007年度：寺院、葬儀業者などへのヒアリング（伊波・篠崎・富岡・田畑・下垣[2008]ほか）
- (3) 2008年度：埼玉県南部において高齢者を対象に質問紙調査を実施（伊波・石塚・篠崎・富岡・田畑・下垣[2008]ほか）

これらより判明している結果としては、調査対象の過半数が“お墓”が必要と感じ、すでに入る“お墓”が決定しているという現状、および「“お墓”は先祖や子孫との接点、または死後自分が落ち着くところ」といったイメージである。また、“お墓”が“死”に対する不安を払拭している可能性も見えている。しかし、この時点ではサンプルが100程度と乏しく、結果の妥当性を訴えづらい。そこで、大規模調査を敢行し、それまでの知見に対する妥当性を検討し、さらに知見を重ねていきたいと考えた。

2. 研究の目的

われわれは、直接的ではなく間接的に“死”への態度を把握できるような調査方法の開発を目標として、“お墓”に注目した。日本

人にとって「お墓」をどうするか」という問いには、墓所のような物理的な場所や墓石のような物といったものだけではなく、個人の内面的な諸概念とも関連するようである。つまり、「お墓」が個人の心理的社会的状況の投影装置として存在し、機能しているという仮説である(図1)。



図1 投影対象としての“お墓”概念図

すなわち、中高年者を対象に、死生観とライフ・イベントとしての“お墓”ならびに“お墓をめぐる意思決定”に対する考え方の関連を調査することにより、現状では把握しづらい日本人の死生観に対する測定アプローチを検討、構築することを目的とした。これは、ひいては高齢者の QOL 向上のインフラ提供につなげうると想定した。

この目的を達成するために、次の4点を研究の課題として設定した。

- (1) 生涯発達心理学の観点から、ライフ・イベントとしての“お墓”決定に対する意識を通じて“死生観”を推測するモデルの構築を行い、間接的に“死”への態度を把握し、高齢者の QOL 向上に役立てる。
- (2) 無形資産としての“お墓”の価値算定を行い、“死”に対する経済学的アプローチを試みる。
- (3) “お墓”を軸として、現代日本の都市部における家族(イエ)の概念を再構築する。
- (4) 宗教や文化によって“死”ならびに家族に対する考え方がどのように異なるのか、“お墓”を機軸として説明を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、直接的ではなく間接的に“死”への態度を把握できるような調査方法の開

発という目標を達成するために、おもに質問紙調査およびインタビュー調査によって進めるものである。

(1) 高齢期の親子関係(家族観)と死生観、QOLに関する文献レビュー

お墓の選択、死生観の形成、精神的健康(QOL)の維持・向上との関連を結びつける理論的根拠についての考察を深めるとともに、インタビューならびに質問紙に含める項目の検討を行った。

(2) 質問紙調査の実施・分析

質問紙調査については、おもに中年以上を対象に、2008年1月以来、11回にわたって調査を実施した(2012年6月現在も調査は継続中である)。東京都内ならびに東京近郊地域在住者を対象にアンケート調査を留置式で行った。調査のアンケート用紙にはプロフィールのほか、以下の項目が含まれた: ①自分自身のお墓に対する態度、②お墓の決定状況・イメージ・決定要因・相談相手など、③QOL(石原ら(1992)による3件法;下位尺度:現在の満足感・心理的不安定感・生活のハリ)、④死への態度(河合ら(1996))、⑤自由記述欄。なお、回答は匿名で依頼し、プライバシーの保護と尊重には十分に留意する旨、回答前に文書や、可能であれば、口頭でも伝えた。

量的分析は統計的手法に基づいて行い、自由記述の項目についてはキーワードを抽出し、KJ法などを用いて質的に分析した。

(3) 専門家ならびに当事者に対するヒアリングならびにインタビュー調査

本研究の特徴は、“お墓”をフィルターとして、個人の死生観を捉える点にあることから、その一背景的要因となると考えられる葬送儀礼や病気の治療、精神的なケアに関わる専門家に対するヒアリング調査を行った。専門家に該当するのは、聖職者、葬祭業者、医療・福祉関係者などである。これらの結果については、質問紙調査の設計などに反映させた。

一方、当事者に対するインタビューについては、適宜、質的分析を行った。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査に基づき、中高年者の QOL と死生観に関する要因を検討し、意思決定プロセスのモデル構築を行った。回答数 563 名(男性 190 名・女性 358 名)の平均年齢は 53.8 歳であり、50 代以降が 80% を占めた。

①属性「きょうだいの有無」に関しては“きょうだいがいる”中での長男もしくは長女が 297 名、“きょうだいなし”の長男・長女(いわゆるひとりっこ)が 26 名、長男・長女以外が 214 名であった。「宗教」については、ほとんどが仏教(259 名)もしくは無宗教(178 名)という結果になった。

「婚姻の状態」は、既婚 397 名、未婚 76 名、死別 32 名、離別 40 名であり、「子どもの有無」は、“子どもあり” 414 名、“子ども無し” 124 名であった。

②お墓への態度 「1 年間でお墓参りに行く回数」については、平均 2.7 回、最頻値 1 回であり、男女差はみられなかった。

「お墓の必要性」については、“お墓は必要” (78.2%) とする割合が高かった。男女別では、男 (85.0%) > 女 (74.4%) と、男性において必要性がより強調されていた ($p=0.00$)。また、「入るお墓の決定状況」について、“決まっている” とした者は 56.1% であった。この点において男女差はみられなかったが、年代による差が認められた ($p=0.00$)。すなわち、高齢になればなるほど決定率が高くなった。一方、その「お墓に入る意思が決まった時期」については、平均 38.8 歳であるが、30 歳代 (29.6%) と 60 歳代 (19.4%) の 2 つにピークがみられた。ただし、20 歳代未満で決定した者も 14.8% いた。これと「入るお墓を決めたタイミング」をあわせてみると、“子どもの頃からの認識” (27%)、“(自分または配偶者の) 親の死” (26%)、“結婚” (18%) が多数を占めた。このことから、結婚ならびに親の死が、“お墓をめぐる意思決定” に重要なライフ・イベントであると考えられた。同時に、“子どもの頃からの認識” であるという回答率の高さから、中高年者においては“イエ” 制度が家族の文化として受け継がれ、認識されていることが伺えた。

③属性と態度との関連 “家長” 制度との関連をみるため、長男とそれ以外の属性で比較してみたところ、「お墓に入ることが決まったタイミング」が「子どもの頃からの認識」である割合が、長男においては 63.8% だったのに対し、長男以外は 26.7% であった。また、「お墓をめぐる意思決定に対する影響を与えた人物」として、全体的な結果では「自分の親」からの影響が 25.6% だったにもかかわらず、長男においては 42.9% と、差がみられた。つまり、少なくとも長男の半数にはイエのお墓に入るという認識が子どもの頃からあり、また、長男がお墓に入るという意思決定には自分の親からの影響を受けていることが示唆された。このようなかたちで、たとえば「長男＝墓守」という図式が、少なくとも中高年者においては保たれていることが伺える結果となった。さらに、「入ることが決まったお墓に対する納得度」からは、90% 以上が意思決定に納得しているのであるが、男女別でみると、女性のほうが納得していない傾向がある (10.6%, $p=0.08$) ことも示された。

このように、エンディングに関しては近年、多様化や個別化の風潮がさかんであることが話題となっている一方で、首都圏内都市部

においても、中高年者においては旧来のお墓観が概して保たれていること、これらの認識にはきょうだい属性差や性差がみられることが明らかとなった。

④お墓の意思決定モデル お墓の選択、死生観の形成、QOL の維持・向上との関連を結びつける理論的根拠について考察した結果、死生観 (積極的受容・中立的受容) がお墓の必要性と関連があり、また、お墓の必要性は QOL (現在の満足感・心理的安定感) と関連することが示唆された。

また、お墓の意思決定モデル (図 2) は次のように示された。

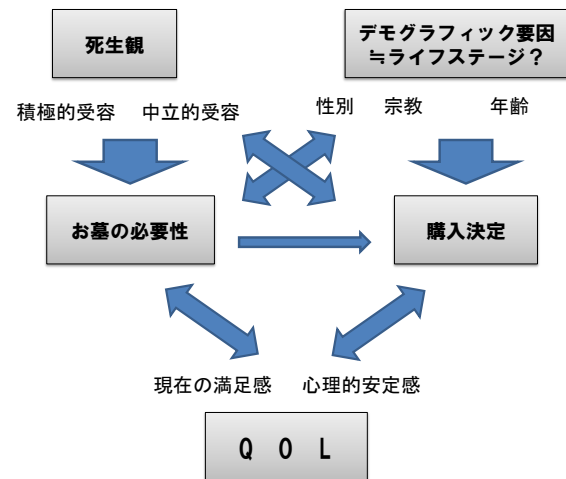


図 2 お墓購入意思決定プロセス

(2) 日本人のお墓観に関する心理的文化的特性を明らかにするために、アメリカ人との比較を行った。インタビュー調査を通じて、東京近郊在住者とサンフランシスコ在住アメリカ人 (16 名) のお墓への態度をめぐる相違性について検討したところ、故人や祖先との情緒的つながりに言及する日本人に対して、アメリカ人においては、お墓を物理的・無機的に捉える傾向が示された。

(3) 文献調査ならびにインタビュー調査を通じて、「誰と一緒に“お墓”に入りたいか」という問いに象徴される家族関係性の再構築が確認された。このプロセスは、定位家族から生殖家族の形成へと至る壮年期に端を発するのではないかという仮説を立てた。その際、家族関係性と職業生活との関連 (両立 / 葛藤) が影響する可能性を検討するために、WFC (ワーク・ファミリー・コンフリクト) に関する調査を行った。インタビュー調査ならびに質問紙調査を通して、壮年期のビジネスパーソンが抱える WFC が定位家族・生殖家族のいずれでも発生しうること、また、同時に発生しうることを示され、それらの WFC 事態

は向老期に先立って、家族関係性の再構築が促される契機となり得ることも示唆された。

これらの、一連の研究が有するインパクトとしては、“お墓”にまつわる意思決定をライフ・イベントとして位置づけ、“お墓”を心理的・社会的内面性の投影対象として捉え、社会科学的にアプローチした点において、学術的独自性があると考えられる。また、“お墓”のもつ多面的価値について、心理学・社会福祉学・社会学・経営システム学・会計学・比較文化論と、それぞれの専門性を活かして学際的にアプローチしたことも特徴的であるだろう。高齢社会の日本において、“お墓”が生活科学領域の研究対象として再認識される一助を務めたとも言えよう。

最後に、今後の課題としては、それぞれ次の点が考えられる。

(1) 国内においては地域比較の研究を進める必要がある。本課題においては、東京近郊の比較的都市部在住の中高齢者を対象とした。購買行動も含めて、無形資産としての“お墓”の価値を明らかにするためであった。ただし、「継ぐべき“お墓”は故郷にあるが、東京近郊での墓地購入を検討している」という意見にみられるように、地方部における“墓守”不在の問題は切実であり、深刻化しつつある。このような、地方部における“お墓”意識についても明らかにすることで、高齢者のお墓観とQOLとの関連性についてより深く論じられるであろうと期待される。

(2) 本課題においては、アメリカ人に焦点をあてたが、海外在住の日本人における“お墓”観や、日本在住の外国人について明らかにすることで、日本人の“お墓”観をめぐる心理的文化的特質がより説明できると思われる。

(3) ワーク・ファミリー関連研究を通して、ライフ・イベントと家族に対するアイデンティティの関わりを把握し、家族の関係性の再構築について検討する。これらの課題を経て、「誰と一緒にのお墓に入りたいか」という意思決定にまつわる中高年期の家族概念を定義していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 石塚一彌・田畑智章・伊波和恵 「お墓」の無形資産評価—「お墓」の役割についての経済学・会計学的アプローチ—, Fuji Business Review, 査読無, 2, 2009, 55—59.
- ② 伊波和恵・石塚一彌・篠崎香織・田畑智

章・富岡次郎 中高年者の「お墓」観(3) —成人期後期以降のライフ・イベント—, Fuji Business Review, 査読無, 2, 2009, 72—73.

[学会発表] (計 12 件)

- ① 田畑智章・伊波和恵, お墓の選び方 —「お墓」への態度と死生観・QOL の関連について— 第 47 回日本経営システム学会全国研究発表大会, 2011/12/4, 山梨学院大学.
- ② Jiro Tomioka, Kazue Inami, The Difference in the Perception towards “Graves” between US and Japan: A Pilot Study of How people See Graves and Dead with Life & Death as Part of Life Event/Life Review. The International Institute for Reminiscence and Life Review, 2011/11/18, Boston.
- ③ 篠崎香織・伊波和恵・田畑智章, ワーク・ファミリー関係研究における「家族」概念の導入(2) —インタビューによる仮説の検証—, 産業・組織心理学会第 27 回大会, 2011/9/3, 中村学園大学.
- ④ 伊波和恵・田畑智章・篠崎香織・下垣光, 中高年者の「お墓」観 —成人期後期以降のライフ・イベント(8): 他世代との比較— 日本応用心理学会第 78 回大会, 2011/9/11, 信州大学.
- ⑤ 伊波和恵, 中高年者の「お墓」観に関する調査より (ワークショップ「団塊の世代の死生観」座長: 野村豊子・大西秀樹) 日本老年社会科学会第 53 回大会, 2011/6/16, 日本社会事業大学.
- ⑥ 伊波和恵(企画), ライフ・イベントとしての「お墓」選び(ラウンドテーブル企画), 日本発達心理学会第 22 回大会, 2011/3/27, 東京学芸大学.
- ⑦ 伊波和恵・下垣光・田畑智章・篠崎香織, 中高年者のライフ・イベント —「お墓」選びの発達段階説的位置づけ— 日本発達心理学会第 22 回大会, 2011/3/27, 東京学芸大学.
- ⑧ 伊波和恵・石塚一彌・篠崎香織・田畑智章・富岡次郎・下垣光, 中高年者の「お墓」観 —成人期後期以降のライフ・イベント(7)—, 日本心理学会第 74 回大会, 2010/9/22, 大阪大学.
- ⑨ 篠崎香織・伊波和恵・田畑智章, ワーク・ファミリー関係研究における「家族」概念の導入 産業・組織心理学会第 26 回大会, 2010/9/4, 東京富士大学.
- ⑩ 石塚一彌・田畑智章・伊波和恵, 「お墓」の無形資産評価 —「お墓」の役割についての経済学・会計学的アプローチ— 日本経営システム学会大会第 43 回全国

研究発表大会, 2009/11/29, 九州産業大学.

- ⑪ Kazue Inami, Kazuya Ishizuka, Kaori Shinozaki, Tomoaki Tabata, Jiro Tomioka, Hikaru Shimogaki, Middle-aged and Elderly People's Perception towards "Graves" in Japan: Decision-making Process about Their Own Graves as Part of Life Event/Life Review. The International Institute for Reminiscence and Life Review, 2009/11/18, Atlanta.
- ⑫ 伊波和恵・石塚一彌・篠崎香織・田畑智章・富岡次郎・下垣光, 中高年者の「お墓」観－成人期後期以降のライフ・イベント(6)－日本心理学会第73回大会, 2009/8/28, 立命館大学.

[図書] (計2件)

- ① 伊波和恵・下垣光・田畑智章・篠崎香織・富岡次郎, 科研費研究報告書(冊子版), 中高年の「お墓」観－成人期後期以降のライフ・イベント－報告書, 2012, 127.
- ② 伊波和恵, ミネルヴァ書房, 老年期 藤村宣之(編著) 発達心理学－人は関わりながら発達する－, 2010, 185-205.

[その他] (計1件)

- ① 伊波和恵・田畑智章・富岡次郎・篠崎香織, 現代のお墓観と死生観の研究－首都圏在住中高年500人のアンケート調査報告(分析と解説)－, 2012, 東京富士大学公開講座(東京富士大学).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊波 和恵 (INAMI KAZUE)
東京富士大学・経営学部・准教授
研究者番号: 90296294

(2) 研究分担者

下垣 光 (SHIMOGAKI HIKARU)
日本社会事業大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号: 30287792

田畑 智章 (TABATA TOMOAKI)
東京富士大学・経営学部・准教授
研究者番号: 00329103

篠崎 香織 (SHINOZAKI KAORI)
東京富士大学・経営学部・准教授
研究者番号: 50362017

富岡 次郎 (TOMIOKA JIRO)

東京富士大学・経営学部・准教授
研究者番号: 60387115

(2) 連携研究者

石塚 一彌 (ISHIZUKA KAZUYA)
東京富士大学・経営学部・准教授
研究者番号: 60440385